慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	編集後記 奥付
Sub Title	
Author	小池, 基之
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1951
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.44, No.11 (1951. 11)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19511101-0077

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ルを收獲し得る。この樣に單位面積當りの收獲量は耕作單位の增大するにつれて多くなる傾向が有る。之は機械作業の優れて居る事を表わすと同時に、一農園當りの農地面積が廣ければ廣い程機械作業に便であり高能率を得る事を物語つている。この結果から、全國棉業會議は耕作單位の擴大と農園の集中統合化を主張している。事實最近の國勢調査によれば一〇%の農家が四〇%の收獲を上げている狀態にある。從つて經營技術も變化し一般產業のそれに近づいて合理化が必要となつて來た。現在協同組合、共販組合も多數設立せられて効果的に運營されつつあり、經營の內容自體も工業化に卽應した方向にあるのを見る事が出來る。

五、勞働問題——南部棉業の機械化に一つの影を投げかけているものに勞働力の問題がある。耕地面積が減少した上に一人當りの生產力が上昇した爲、一九四五年以降の十年間に二〇〇萬以上の人口が職を失うであろうと推定されている。その轉換・吸收は可成り困難を伴う問題である。一方必要とせられる勞働者の性格自體も從來とは異つたものと成つた。新しい機械を使用する爲にはそれだけの敎育が必要であり、又その爲には高い生活水準を維持する必要が生ずる。その點に就き一九四七年全國農業勞働組合は「南部勞働者は機械化が顯著に成ると共に著しく組合の努力に應える樣になつた」とその進步を認めている。併し小農家は土地も資本も少く機械・技術に缺けて生產力も劣り高い生活水準を維持する事は難しいから脫落せざるを得ない事と成る。とは云え彼等を無秩序に閉め出す事は危險であるから、その吸收を漸次にする爲南部に併行產業を興す事が最も望ましい。但し現在、政府もその計劃に着手するに至つていない。勞働問題を如何に解決するかは南部工業化の今後に掛つた大きな課題である。

結語——從來棉業に於て一定の收入を得るには、小麥の五倍、玉蜀黍の三・五倍の勞力を必要としていた。棉業の機械化が凡ゆる意味でその樣な不利な事情を消滅し、その生產費を低下せしめ、價格を引下げ得る事は今迄述べた所である。そしてその價格引下げへの要望こそ南部棉業者をして機械に趨らせた第一の要因であつた。最初に述べた樣に世界市場・國內市場に於て外國棉及び合成纖維との競爭の激化が豫想される現在、南部棉業は今後益〻栽培の機械を圖る必要に迫られ、棉業は工業化を通じて近代產業の形態に變貌して行くと考えられる。又それに伴つて南部自體も全般的な產業化に向うであろう。

（平賀健吉）

編集後記

○　每度のことであるが、學會機關誌の編集のむずかしさをいまさらながら痛感せざるをえない。その「むずかしさ」は學會機關誌の編集がいわゆる「雜誌」の編集とその本質を異にするところに由來するといえるのではなかろうか。とすれば、それは結局、學會の機關誌なるものがいわゆる「雜誌」に對してもつ性質と意義との差異に關することとなるであろう。

○　學會の機關誌は廣く內外の研究者を對象としているとともに、それはその學會の研究發表の機關である。このような點からいえば、執筆者は同時に編集者であるといつて差支えないであろう。ここでは、編集委員會は、丁度農業勞働が稻や麥の生育、結實に外からはたらきかけるように、研究者の勞作を一册の雜誌にまとめあげるという點にその「主體性」の發現する場をみいだすのである。そういつたからといつて、編集委員會が自ら編集の責任を回避するというのではもちろんない。いわゆる「編集後記」がその「雜誌」をつらぬく編集の意圖や編集者の問題意識を展開することを通念とするならば、これは「編集後記」を書くに當つていささかの自己辯解にほかならないのである。

○　講和をむかえて、戰後および講和後の日本經濟の動向については、誰しも深い關心をよせるところであろう。本號には、先頃おこなわれた京濱工場地帶の實態調査についての森助敎授による分析をのせることが出來た。なおそれとならんで、講和後の日本經濟の諸問題について、伊東敎授の論稿を豫定していたのであるが、長文のため次號に揭載するのやむなきにいたつたことを諒とされたい。

（小池基之）

昭和二十六年十月二十五日印刷　第四十四卷
昭和二十六年十一月一日發行　第十一號

本號　定價七拾圓
送料四圓

禁轉載

編輯發行兼發行者　東京都港區芝三田慶大經濟學部內　高村象平
印刷者　東京都港區芝三田豐岡町八　川口芳太郎
印刷所　東京都港區芝三田豐岡町八　圖書印刷株式會社

豫約購讀料一年分　金八四〇圓（送料共）
半ケ年分　金四二〇圓（〃）

豫約購讀料は發行所宛お拂込み下さい。
誌代變更の場合は精算決濟致します。
編集に關する用件、營業に關する用件、販賣申込も發行所へ願います。

發行所　東京都港區芝三田二丁目　慶應義塾大學經濟學部研究室內　慶應義塾經濟學會
日本出版協會員B二一〇一六